



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	果菜類の整枝
Author(s)	友寄, 長重
Citation	琉大農家便り(41): 5-5
Issue Date	1959-04
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19929
Rights	

果菜類の整枝

一、整枝の目的

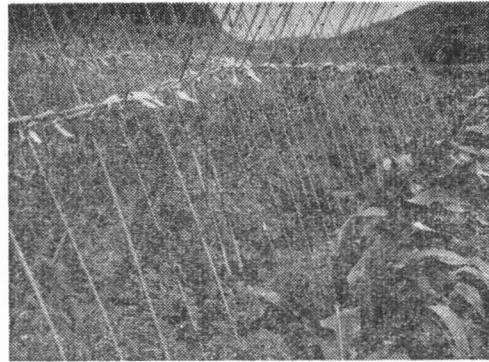
粗放な栽培では整枝は不要である。しかし、密植して、一定期迄に収穫を打切り、早期多収を得ようとする時には整枝は必要になってくる。相当粗植して、長期間かかつて、一株毎の収量を最高度にあげ、それによつて単位面積あたりの総収量をあげることが目的とする栽培法では、整枝しない方が葉面積が多く、光合成がさかんになり、最後には収穫果数、一個平均量も多い。然し、わが琉球のように土地が狭い所では、一作物による畑の使用期間を短縮し、利用回数を多くし、単位期間あたりの収益を増大するように栽培しなければならぬ。それで果菜類を早くきりあげて跡作に移るか、あるいは早期多収により、単価の高い時期に出荷するためには密植し、整枝する必要がある。

近來行なわれ始めたスイカの密植栽培でも、嚴重な整枝が必要条件であつて、もし整枝を怠り初期の雌花をとめることが出来なければ、その後の着果は非常に困難となります。カボチャ、キウリでも同様であります。

二、整枝の基礎

整枝をするには各果菜の結果習性を学ぶ必要がある。最も能率のよい葉を残し、着花のおそい非能率的な葉を取り去るべきである。整枝は一面結果数の減少になるが、着果上最も有利な葉のみにし、更にこれを摘心することが多いので、一果あたりの葉数、葉面積を減少させるのが一般である。

一果あたりの葉数、葉面積が減少しても、ある限度迄は葉の効率が增大して、葉面積の減少程には果実の肥大は劣らないが、やはりその肥大速度は減少し、肥大が不十分になつたり、株が疲れることは否めない。従つて余り強い整枝は、収量を減ずるだけでなく、品質が悪くなり、収穫期間が長続きしなくなる。



三、整枝の方法

整枝は始めの果実に対してはプラスに働くが、新しい結果面、栄養生産面がないために次期のものに対してはマイナスに働くわけである。従つて株間、収穫打切り予定をにらみ合わせ、適当な程度としなければならぬ。一旦成長した枝を切除することは、単に栄養的な浪費であるばかりでなく、残された葉が、葉面の減少を補うため、大形になることを困難にする。又残された成熟した枝では、思う所に側枝を発生せしめることが困難になつてくる。整枝を強行なうことは、又根の

発育も抑制する。従つて強整枝は多肥を要し、又早害を受け易くなり、更にトマトでは陽やけ果や裂果を生じ易く、尻腐病果も多くなる傾向があるので注意を要する。要するに整枝は剪定の形ではなく、摘芽の形で早めに行なわなければならない。摘心の場合、果実の上部には葉を残すべきで、整枝に際しては、常に葉面積の過度の減少を警戒しなければならない。

四、着花習性

着花の習性は、各々の種によつて大体定まつているが、又品種によつてある程度の差異がある。更にこれ等は環境要因により可成変動し、又その変動の様相が種類、品種によつて異なるので、厳密にはなかなかむずかしい問題である。

例えばキウリでは、低温、短日が節成性を増大する。節成性の増大は又側枝の発生を限定するので、育苗栽培の場合にはその調節はかなりむずかしい問題である。

更に日長に対する感応性も、系統、品種によつて非常に差異が認められ、品種により整枝法を異にしなければならない。

カボチャにおいても播種期がおくれ、長日期となると雌花の着生は不良となり、更に高温期に入れば雌花が雄性化し、両全花を生じることが知られている。

トマト、ナス等においては環境又は栄養状態によつて支配されることは少ない。従つて整枝法は比較的固定的である。トマトの二本仕立ては本葉第八葉目の所から強力な側枝が出るのでそれを残し、他の側枝は摘芽する。摘芽に際してはウィルス病の伝播をさけるよう、摘芽する芽だけを二指で横にかき取るようにします。